

犬の前十字靭帯断裂症例に行った関節鏡検査所見とその有用性

山口 力

ファール動物医療センター

大阪府門真市南野口町4-8

1. はじめに：成犬における後肢跛行の原因は前十字靭帯断裂が最も多い。しかし触診でドロアーサインの見られない部分断裂はその確定診断には苦慮する。今回我々は後肢跛行を呈する犬で、前十字靭帯断裂が疑われる症例に膝関節の関節鏡検査を行った。前十字靭帯の完全断裂、部分断裂の診断とそれに伴って起こる半月板損傷や軟骨の損傷、骨棘の形体を判断するのに有用であった。

2. 材料および方法：2007年5月から2009年10月までに来院した前十字靭帯断裂症例の中、大型犬149関節の関節鏡検査について調査した。前十字靭帯断裂を疑い関節鏡検査を行う判断基準は、次のようにした。①膝関節に疼痛がある。②膝関節のレントゲン検査でファットサインがみられる。③sit test 陽性（お座りをさせると膝が十分に曲がらない。④膝蓋骨外方脱臼がない。⑤大腿骨の離断性骨軟骨症がない。⑥関節液の細胞診で好中球や腫瘍細胞などが見られない。⑦CRPは1以下。以上の7つの条件を満たしておれば前十字靭帯の断裂が疑われると判断し関節鏡検査を行った。その時ドロアーサインの有無にはこだわらなかった。使用した関節鏡の径は大型犬で2.7mm、中型犬（5kg以上）では2.4mmで先端角度30度のものを使用した。膝関節を観察する上で障害となる脂肪や断裂した靭帯の断端などはシェーバーを用いて取り除いた。

3. 成績：前十字靭帯断裂が疑われる判断基準を有する症例は全てにおいて前十字靭帯の完全断裂か部分断裂が存在した。その内訳は完全断裂が65%、機能的断裂（肉眼的には断裂していないが張りが無く、伸びきって靭帯として機能していないもの）を含めた部分断裂が35%であった。149関節における犬種は、28犬種で雑種を含む多くの犬種で見られた。最も多かった犬種はコーギーで23関節、次いで雑種、ラブラドルがそれぞれ21関節、バーニーズが10関節の順で多かった。来院件数が比較的多いミニチュアダックスフントに前十字靭帯の断裂は見られなかった。発症年齢は1才以下が1頭と少なかったが、1才から10才以上まで1年ごとに年齢を区切って統計をとると発症年齢に大きな差はなかった。しかし比較的若い年齢で発症するものは大型犬が多かった。内側半月板の異常は約40%で見られた。後方部分の裂け目から逸脱するバケットハンドルタイプが最も多く、全ての前十字靭帯断裂症例の25%に見られた。外側半月板の処置を要する損傷は9%に見られ、そのほとんどが前方部分に見られた。損傷のタイプは大腿骨に擦られることによる変性であった。

4. 結論：膝関節の関節鏡検査は経験を要し、他関節より難易度が高い。しかし関節鏡の挿入部を正確に行い、性能のよいシェーバーを用いて視野を妨げる脂肪や断裂した靭帯の断端を適切に処理することで関節内の構造物が拡大像で観察できる。また動的状態下での半月板の状態、プロ

ープを用いての触診も可能であることから関節切開による診断より正確であろう。十字靱帯の部分断裂や半月板損傷の正確な診断において、関節鏡検査は非常に有用性が高いと思われた。